

智顗の三諦思想

稲葉 広 由

1

周知のように、智顗は自らの受け取った大乘仏教の説く空の思想を、端的に「三諦」と表現した。智顗の三諦思想は、成実師、三論師による二諦説の影響を受けるものであるが、今回はこのことについては考慮せずに、智顗の三諦思想の發揮する所を、実践法門を説く『摩訶止観』の主に破法偏によって述べてみたい。

初めに『摩訶止観』全体を概観すれば、第二釈名章では、止観の名義を絶待止観と定めることにより、待対を絶して言葉の働きを越えた悟りの世界である独一法界を、止観の根底に据えている。続いて第三体相章では、円頓止観の教相を一心三観によって示しており、止観の本質を追及する中で、三諦思想を明らかにしている。この釈名・体相章が止観の理念を標榜しているのに対して、第七正修止観章では、具体的な止観の実践において三諦を觀察することを説く。十乗観法の

中の三番目の善巧安心では、行者が自利・利他にわたって止観を行うことにより、心を法性に安んずることを説く。この善巧安心は、止観を仏道修行の骨格として定めるということから、十乗観法の中心をなすと言うことができる。続く破法偏では、善巧安心によって心を法性に安んずることができなかった場合には、三観により顛倒を破して三諦に立たしめることを説いて、止観によって目指される境地が三諦として展開することが実に詳細に述べられている。

2

智顗はこの破法偏を説くに当たって、『涅槃經』中の「不生、不生、生、生」の四句を引き、この四句に自行の因果、化他の能所の法の遍く摂まることを示すことによって、無生門に全ての仏法の摂まることを明らかにしている。その上で、無生門の立場より三観を明らかにしている。ここにいう無生門とは、大乘仏教に説く空の教えに外ならな

い。このことより、破法偏において智顗は、無生門、即ち空の教えの意義を問ひ直すことによって、仏教の面目を明らかにしようとしていると言ふことができる。

破法偏では、從仮入空觀、從空入假觀、中道第一義諦觀の次第順序を経て、三觀の内容を明らかにしているので、今もこの順序に従つて考察を加えていく。

從仮入空觀では初めに、見思の惑を、実体の無いものを実と捉える虚妄顛倒であるので仮と名付け、更に『成実論』に拠つて、仮を因成仮、相続仮、相待仮の三仮に分類している。その上で、竜樹が『中論』に「諸法不_二自生、亦不_二從_レ他生、不_レ共_二無因、是故說_二無生。」と説く四句推檢を用いて、仮を徹底的に破することによって、空の真理を明かにするのが、從仮入空觀である。ここで留意しておきたいのは、從仮入空觀以下の三觀の名目は、『璣絡經』に拠つて立てているけれども、空觀の内容自体は、はっきりと竜樹の教学を拠り所として述べることである。

前期時代においても、例えば『法華三昧懺儀』においては、同様に四句推檢を用いて空觀を説明している。しかし『摩訶止觀』の異なるのは、こういった空觀を説明する中で、虚無的な空の理解に対して厳しい批判を加えていることである。例えば、有無の二見を離れた非有非無こそ、『中論』にいう中道であるとする見解に執られてしまう者を挙げて、次

のよう言う。

謂_二非有非無_一以為_二正法_一、乃破_二一切世間因果_一故名_二非有_一、破_二一切世間因果_一故名_二非無_一、破_二正見威儀_一。尚不_レ當_二世間道理_一、云何能當_二出世道理_一。寧起_二我見_一如_二須弥山_一、不_二惡取空_一。不正為_レ正是名_二邪見_一。

ここで智顗が批判するのは、この者が非有非無の見を仏教の正法と見なすことによって、世間・出世間の因果の存在意義を認めずに、かえつて仏法自体を破壊してしまうからである。『摩訶止觀』において智顗は、このように空見に執われる者を惡取空と呼んで何度も批判を加えている。ここに、當時、広く行われていたと思われる虚無的な空理解に対して、彼が非常な危機感を抱いていたことを窺うことができる。

『中論』の觀四諦品では、惡取空に対して、一諦を説くことによって空の実践的な意義を明らかにしている。智顗が惡取空の者を批判する中には、彼自身が当時の時代社会の中で、竜樹と同じ視点に立つて、空觀の本当の意義はどこにあるのかを、改めて問ひ直さねばならなかったことを看取することができると思う。

3

次に從空入假觀とは、

菩薩從_レ假入_レ空自破_二縛著_一、不_レ同_二凡夫_一。從_レ空入_レ假破_二他縛著_一、

不_レ同_二三乘_一。処_レ有_レ不_レ染。法眼識_レ藥、慈悲逗_レ病_③。

とあるように、一旦、仮を破して空に入った菩薩が、空は空に非ずと知って、今度は積極的に利他行に乗り出すことである。仮観で明らかとなる仮の真理とは、先の空観で破壊の対象となった虚妄顛倒の仮とは異なる。ここでいう仮の真理とは、止観を行じる菩薩が衆生済度に乗り出す中で、衆生の病とそれを直す法薬とが明らかとなってくることである。そして、この仮観の具体的な内容として、知病・識藥・応病授藥の三つを挙げている。このうち、知病とは、無量の衆生一人一人の見思の病を明らかに知ることであり、識藥とは、衆生に無量の病相があるのに応じて、それを癒す法薬も無量に必要であり、この無量の法薬を識ることである。応病授藥とは、個々の衆生の病相に応じた法薬を適切に授けることである。

このうち、法薬を世間の法薬、出世間の法薬、出世間上上の法薬の三種に区分する。この中で、無上の法薬とされる出世間上上の法薬とは、「当_レ知、止観為_レ益衆生_二随_レ根増減_④」と説明されるように、止観より生み出される法薬のことである。菩薩は仮観を行う中で、一切衆生の病に対応するため、無量の法薬を知る必要があるが、

又如_二大地產_レ藥而分割作_レ方。如_二大河水分_レ劑升合_一不_レ過不_レ減。法藥亦爾。於_二寂定_一開_二無量止_一、於_二大慧_一開_二無量觀_一。皆美不_レ。

處_⑤。

とあるように、無量の薬が皆、大地より生み出されるのと同じく、無量の法薬もその源泉は止観にあると述べている。智顗は、一切衆生の病気を癒す法薬の源を、確信をもって止観に見い出したのである。それでは、ここで言う止観とは、何を指し示しているのか。『摩訶止観』では、体相章において止観の本質を一心三観とするように、止と観のうちの観、即ち智慧の側面を重視する。故に、この場合の止観とは、般若の智慧を指し示していると言うことができる。

この無量の法薬の源である智慧を、仮観の中で如何に用いるかについて、智顗は次のように言う。

仏初出世衆生機熟、逗_レ根說_レ法無_レ不_レ得_レ悟。後代滂漓情感顛異。直用_二仏經_一、於_レ其無_レ益。菩薩觀_レ機通_レ經作_レ論、令_二衆生得_レ悟、唯悟_二益彼_一。是人假正意。豈可_二守_レ旧壘_一於化道耶_⑥。

仏教の經典は、相手の機根に応じて説かれたのであり、時代が変われば、衆生の機根も変わるので、菩薩は頑なに經典を守るのではなく、時代に応じて論を作り、衆生を悟りに導くことこそ必要であり、これが仮観の正意であると述べている。このように、出世の法薬といっても、經典の文句に執われているだけでは何の意味もない。最上の法薬である般若の智慧を現実の社会の中に如何に活かすことができるのが、智顗にとっては切実な問題であったことを、仮観を説く中に

窺うことができる。先の空観の内容と比較すれば、現実の諸法との積極的な関わりの中で、空観の意義を問い直そうとしたと言いうことができる。

4

今まで述べて来た、空観において仮を破すことによって明らかとなる空の真理と、仮観において、逆に仮に出ることによって明らかとなる仮の真理とは、互いに相矛盾する真理である。中道正観とは、この矛盾を克服して二辺を離れる観法であり、中道の理に立つことによって無明を破して、もののありのままのすがたを知るのである。破法徧では、中道正観の具体的な観法として、空仮の二智を手掛かりにして無明を破することが述べられてある。

中道正観について、智顗が強調するのは別教と円教の相違点である。別教では、眼の闇き者が針を穿つように、中道の理を修行の遙か彼方に見る。これに対して、「円教不爾。祇於三身^三即破^二兩惑、即入^三中道、一生可^レ弁^一。」と述べられるように、空観、仮観を行う菩薩のこの身において中道の理を明らかにしようとするのが、智顗の言わんとする円教の中道正観である。

そして、今まで次第して三観について述べて来たのは、一心の内容を説明しようとしたためであって、実には一心中に

空・仮・中の三諦を相即して具えると説くのが、智顗の真意である。

先に見た空・仮二観は、菩薩の現実の生き様に外ならず、この空・仮二観において中道を自覚していくのであるから、常に現実の人間の生きていく当処において、仏教の究極の真理をたずね当てようとするのが、智顗の三諦思想の特色であると言えよう。そして、このような智顗の真理観は、先に空観、仮観の中で触れたように、若い頃には空観だけで満足しておれたけれども、どちらとした現実の社会に揉まれる中で、還ってその社会の中に仏教を活かそうとした智顗の生き様を、よく表していると言えるであろう。

- 1 『法華三昧懺儀』（大正四六・九五四上）
- 2 『摩訶止観』（大正四六・六六中）
- 3 同右（大正四六・七五下）
- 4 同右（大正四六・七八上）
- 5 同右（大正四六・七八上、中）
- 6 同右（大正四六・七八中）
- 7 同右（大正四六・八〇下）

〈キーワード〉『摩訶止観』、破法徧、三諦

（大谷大学真宗総合研究所研究補助員）